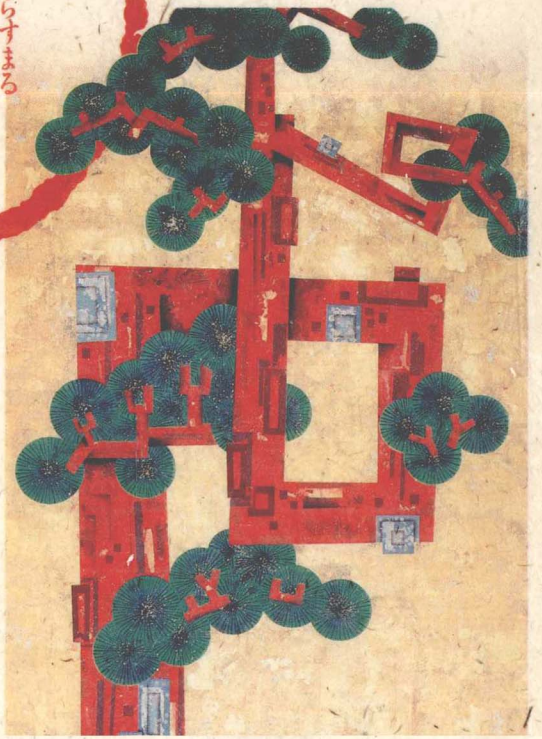
烏丸ものがたり

からすまる

tomomi muramatsu

村松友視



烏丸ものがたり

からすまる

tomomi muramatsu

村松友視

河出書房新社

村松友視（むらまつ　ともみ）
一九四〇年、東京に生まれる。慶応大学文学部哲学科卒業。出版社勤務を経て、文筆活動に入る。一九八二年、『時代屋の女房』で第八七回直木賞受賞。著書として『上海ララバイ』『夢の始末書』『海猫屋の客』『巴川』『由比正雪』『サイゴン・ブルー』など多数。

烏丸（からすまる）ものがたり

一九九三年五月一〇日　初版印刷
一九九三年五月二〇日　初版発行

著　者　村松友視
装　幀　菊地信義
装　画　谷川泰宏
発行者　清水　勝
発行所　株式会社　河出書房新社
東京都渋谷区千駄ヶ谷二―三二―二
電話　三四〇四―一二〇一（営業）
　　三四〇四―八六一一（編集）
振替口座　（東京）〇―一〇八〇二
印刷　大日本印刷株式会社
製本　小高製本工業株式会社
©1993 Printed in Japan
定価はカバー・帯に表示してあります
落丁本・乱丁本はお取替えいたします
ISBN4-309-00837-2

烏丸（からすまる）ものがたり

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

一

火入れの儀式がすんだあとも、沖合いに浮かぶ船がはっきりと見えていた。海からの強い風にあおられて、火の粉が派手に宙を舞い、見物席からどよめきが生じた。薪の燃える音が意外に大きく、能舞台を見守っていた客たちも、声をあげてしばし松明の燃えさかるさまに目を向けていた。

（この醍醐味だな……）

七年前から足を運んでいる私は、客のどよめきに満足するように唇をかんだ。羽衣の松で薪能「羽衣」を見る……これは、この三保岬の対岸の清水で育った私にとって、かつて

見た淡い風景を、極彩色に塗りかえるような体験だった。

三保の松原は、幼い頃には何度もやって来た場所だった。それは自分自身の興味のためではなく、親戚の叔父や叔母を案内する役目のためだった。日本平、龍華寺、鉄舟寺、梅蔭寺、それに静岡の臨済寺や登呂遺跡、あるいは浅間神社などへ何度も案内役をやらされたが、その中でも三保の松原は殺風景な場所だった。

三保の松原には、無数の松の木が生えていたが、海に近い砂地にひときわ大きく、不思議なかたちに歪んだ松があって、その一本だけが、柵で囲われていた。それが羽衣の松だった。羽衣伝説にちなむ、樹齢六百年という黒松の古木だ。天女が羽衣を掛けたといわれる伝説の松は、宝永四年の富士噴火によって海中に没したのだという。羽衣伝説を愛する人々が当代の松をどこかから移植したといったいきさつが、当時から説明書に書かれていた。

観光名所の三保の松原といっても、見物するべきものは羽衣の松くらいのものだった。近くの御穂（みほ）神社に、羽衣の切れはしと伝わる布片が陳列されていて、小学校のときに一度見たことがあったが、あまり実感がわかなかった。伝説は伝説としての額縁の中へ押し込め、証拠の品などは残っていない方が神秘的だという気もした。かつて私がそんな三保の

松原への案内役をいやがらなかったのは、砂浜の高台にある茶店で食べるおでんが楽しみだったからだ。

今も、三保の浜辺にある茶店には、当時と同じおでんがあった。弁当箱の中にだし粉と青海苔が入っていて、おでんをそこへ突っ込んで粉まみれのようにして食べるやつだ。薪能の前に、私はかならず茶店へ寄って、このおでんを食べることにしている。大きいホテルと旅館が二つできたくらいで、三保の松原の風景は当時と変ったようには思えなかった。

（だが、火入れの儀式のあと三保の松原は嘘みたいなけしきになる……）

私は、そんなことを呟きながら、宙に舞う火の粉に目を凝らした。狂言が終り、休憩のあと能の「羽衣」となった。空はまだ暮れ切らず、沖を行く船がはっきりとした影となって見えている。橋掛（はしがかり）からワキである漁夫が登場し、沖の船とすれちがったようになった。ワキのうごきと沖の船の移動が、おそろしいほどにゆったりとした速度で行きちがったとき、そこに激しい火花が散ったような錯覚をおぼえた。これは、七年前にも感じたことだったが、予感をもってその瞬間を待ちかまえていると、さらに強い感動が生じた。私は、このシーンを目撃するためにここへ来ているといってもよかった。不思議なことに、この一瞬をさかいにして空は漆黒の天幕となり、沖のけしきは消えて、松明に照らし出された

能舞台だけが浮き出てくる。羽衣の松で「羽衣」が演じられていることを思うと、薪能はやはり幻想的なシーンとして胸に迫るものがあった。

私は今年もまた空が暮れる直前の、あの幻妙な場面に惹かれた。これまで見た七回のうち、三度ほど沖の船とシテの登場がタイミングよくすれちがった。沖に船がいないときの場面を思い浮かべると、船の存在は価千金という気がした。そんな舞台の見方をするということ自体、私の神経の横這いにはちがいない。第一、あんな場面を気にしている見物人など、私のほかにいるはずもないのだ。

すべての演(だ)し物が終り、人々に混って清水行のバスの停留所へ向かって歩き始めたとき、私は首筋のあたりに人の視線を感じてふり返った。小柄な中年男が、たじろいだようにそこに立っていた。男の顔が少しほころんだとき、私はすぐに記憶の中から男の名前をたぐりよせることができた。唇の右端にある黒子(ほくろ)が、笑うとえくぼの中へ隠れ込んでしまうのを、私は手品を見るような気分でよくながめたものだった。

「もしかしたら、本多くん……」

そう言ってみると、男は大きくうなずいてえくぼの中へ黒子をしまい込んだ。

「よく分ったなあ、しかもうしろから」

私は、中学時代からの友だちであった本多を、まじまじとみつめた。本多は、髪の毛も黒々としていて、学生時代と少しも変らないように見えた。極端な撫で肩で、肌の色が蒼さをおびているのも同じだった。自分の変りようは分らないが、夜の三保の松原という突飛な場所で、しかも人群れの中を行くうしろ姿だ。それを私と知ってじっと目を注いでいたらしい本多に、いささか不気味さをおぼえたのもたしかだった。

「あんた、むかしと同じだもの……」

私の言葉に対して、本多はかすかに笑みをふくんだ顔で言った。

「もう五十だぜ。むかしと同じってことはありっこないよ」

本多の言い方がありきたりのお愛想でないのは分っていたが、むかしと同じと言われてすとんと腑に落ちるのは無理だった。たしかに、睫も長く黒眼がちの幼顔のままで、髪も真っ黒という同級生に会うこともあるが、私はそういうタイプではないはずだ。若い……というならば、大学を出て就職をしたものの長続きせず、無名の作家の陶器や磁器の作品を陳列する工芸品店みたいなものを、気楽にやっているせいで、年齢よりも二つ三つ若く見えるというくらいのことだろう。サラリーマンをつづけていれば、すでに定年後の計画を意識してもおかしくない頃だが、東京武蔵野の吉祥寺に「ＫＯＨＥＴＳＵ」という小さ

な店を出し、日に何人来るでもない客のために、奥でぼんやりと本を読んで過すなりわいでは、そのような貫禄も身につかないというわけだ。それに、子供もいない妻との二人暮しだから、父親としての威厳とも無縁だ。

「むかしと同じだよ、ちっとも変ってないだよ」

本多が、すんなりと清水弁の抑揚で喋ったので、彼の姿がかつての像とあざやかにかさなった。こっちで暮しているわけだ……地元の言葉がごく自然に出てくるのはそういうことだろうと思って、私は本多の唇の右端の黒子をながめた。

「あんたの気配がね、ちっとも変っちゃいないっけだよ」

「気配が……」

「むかしっから、あんたはそういう気配だっただよ」

「そうかなあ」

「まあ、自分の気配は自分じゃ分んないに決まってるけどな」

本多は、愉快そうに笑った。やがて、二人は人混みの流れに沿って歩き始めた。私がいま東京の武蔵野に住んでいることを話すと、本多はけっきょく家業の酒屋を継いでいると身の上を語った。高校のときから演劇に興味を抱き、大学時代にも小さな劇団を主宰して

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

いたはずの本多が、家業の酒屋を継ぐようになったについては、かなりのいきさつがあったにちがいない。私は、本多の世界へどれほど踏み込むのがよいのかを考えながら、自分も含めた人群れが砂を押して進む足音のリズムを聞いていた。

「車、あるのかね……」

人がまばらになった頃、本多は少し離れた駐車場を指さし、車へ乗って来ているからよかったら送って行くと言った。これくらいはしてもらった方がむかしの友だちとして自然か……私は、そう思ってかるくうなずいた。本多が運転する車に乗せてもらうのは、妙な気分だった。極端に運動神経のない本多が、よく運転免許を取れたものだと感心したいくらいだ。もっとも、私にしたところで車とは無縁の生活をつづけている。大学生の頃に試験を受けようと思ったが、雨の日に練習をしているとき、ワイパーのうごきを目が追ってしまい、その先のけしきを見ようとしない自分に気づき、どうやら運転には向かない神経の持ち主なのだろうと、それいらい車の運転はあきらめている。

本多の運転は、思ったより上手だった。アクセルとブレーキを交互に踏むようなぎくしゃくとした運転を想像したが、ハンドルさばきも意外なほどスムーズだった。運転席と助手席でお互いに前方を見るかたちになると、向かい合っていたときの緊張がゆっくりと溶

けていった。
「仕事は何を……」
本多は、前方をみつめたまま言った。
「武蔵野の吉祥寺っていう街でね、焼きものを店に飾っているだけの商売」
「焼きものって、陶器や磁器……」
「それにガラスね、無名の何でもない作家のものに限って置いてあるんだけど」
「あんたらしいじゃん」
「まあ、有名な作家は置こうと思っても置けないから、こっちで断ってるみたいなポーズをとってるだけだけど」
「それも、あんたらしい」
「……」
「あんた、そういう逆転うまかったものなあ」
「そうかな」
私は、首をかしげて見せたものの、たしかにそういう一面が自分にあることに思い当った。逆転……という本多の言い方が妙になつかしかった。いかにも演劇に手を染めた者ら

しい呼吸で、その言葉が吐き出されたせいかもしれなかった。
「今夜このまま帰るのかね、それとも一泊するのかね」
「さあ、どうしようかと」
「よかったらあした、興津の清見寺へでも行ってみないかね」
「清見寺……」
「中学生の頃、よく二人で行ったっけなあ」
「そう、清見寺へはよく行った……」
私と本多は、中学一年生のとき歴史部というクラブへ入っていた。二人とも中学生のくせに古臭いことに興味を持っていて、それが気の合う理由だった。本多は興津の酒屋の長男だったが、静岡の中学へ東海道線で通っていた。私もまた清水からの電車通学だったから、越境入学同士ということが、親しさを生んでいたのかもしれなかった。歴史部といっても、図書館でそれらしい本を読むくらいのクラブで、私と本多には物足りなかった。私は、家にあった古銭や刀剣の付属品を披露し、本多はおじいさんが集めたという歌舞伎関係の品々や「演劇界」という歌舞伎雑誌の古い号を自慢した。日曜日には、よく駿府城の内堀でボートに乗り、石垣に刻まれた家紋を拓本に取ったものだった。家康の隠居城を造

るに当って、全国の大名が家紋を刻んだ巨石を寄進した、その家紋の拓本を堀の石垣から取ったのだった。中には切支丹大名の家紋が刻まれた十字架やマリアの像が浮き出た石もあり、本多と私はそれを見つけると、辺りを見回して秘密めいたうなずき合いをしたものだった。

駿府城の内堀の中には、すでに城の痕跡も残っておらず、城趾に建てられた静岡三十四聯隊の兵舎の名残りがあって、私や本多が通っていたのは、その兵舎を教室として使用している中学校だった。全体が城趾の空地となっていて、石垣に沿ったところに校舎があり、運動場が敷地のごく一部で、あとはだだっ広い奇妙な学校だった。それでも、かつて家康の隠居城であった駿府城のあとにある学校へ通っているという自負心は、生徒の中に浸透していたような気がする。

私は、興津の本多の家へ何度か遊びに行ったし、本多もまた清水の私の家へよくやって来た。酒屋を営んでいる本多の家の、店先から茶の間へ向かっての洞穴のような薄暗いけしきが、私の目にあざやかに残っている。茶の間のわきをさらに奥へ行くと小さな庭があり、そこに物置小屋を改造した本多の勉強部屋があった。「演劇界」のバックナンバーやら古い大福帳やら大相撲の番付けやら、本多の勉強部屋には少年らしくない雰囲気がただ

よっていた。

「おまえっちと同じずら」

私がその部屋を爺むさいと言うと、本多は口を尖らせて私の目をのぞき込んだ。その表情には、同じ匂いを好む仲間といった親近感があらわれていた。私の家にはたしかに、子供のいる家庭の雰囲気がなかった。神社の裏にある家に、私は祖母と二人きりで住んでいた。父は私が生れる前にこの世を去り、母は他家へ嫁いで行ったので、私は祖父母の籍へ入れられて育ったのだった。事情があって祖父は祖母と別居し、そこからの仕送りで祖母と私の生活は成り立っていた。祖母との二人暮しをしていた清水の家には、戦前に祖父が買い揃えた家具や道具類が残っていたから、私は幼い頃からそういう環境の中で育った。そこには、本多にとって自分の家の雰囲気に馴染む匂いがあったのだろう。

興津の本多の家へ遊びに行くと、私たちはかならず清見寺へ行った。興津から由比にかけては、海岸線と切り立った山肌にはさまれた帯状の街がつづき、旧東海道の趣きが変らずに残っている。清見寺は、海岸線から東海道を山側へ渡り、東海道本線の上を渡るようにして登ったところにある大きな寺だった。本多の住む興津に思いもかけぬ立派な寺があることに、中学生の私は少しおどろいた。静岡は県庁もあり、かつては家康が住んでいた

城のある城下町、清水はその静岡の隣りの宿場で、とりあえず江戸時代から港町として栄えていた。だが、そのすぐ隣りの興津はといえば、むかしは東海道五十三次のひとつではあったが、現在では何ということもない漁師町のように思っていた。その興津にこのような大袈裟な寺が存在したことに、中学生の私が意外な感じを受けたのだった。

「むかしは、興津は凄かっただよ」

本多は、私の感想に対して例によって口を尖らせ、西園寺公望やら水口屋という有名な旅館やら、千利休の茶杓が秘蔵されているという清見寺についてあれこれと説明していた。その内容はすっかり忘れてしまったが、とにかく時をさかのぼれば興津という町も清見寺という寺も、私が思っている以上のすごい存在だったということを力説していたにちがいない。その清見寺へ行ってみようという本多の言葉が、三保の松原の薪能で二十五年ぶりに会った私に向けられたのはなぜだろう。私には、それが時のへだたりを消してしまうほどに自然な言葉のようでもあり、あまりにも唐突で謎めいた言葉のようにも感じられた。

「どうする……」

本多は、前へ目を向けたままポツリと言った。

「清見寺のこと?」

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com